10 ブロック内中核拠点病院間における相互交流によるHIV診療環境の相互評価とMSWと協働による要介護・要支援者に対する療養支援ネットワーク構築

研究分担者　大金 美和
国立研究開発法人国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター 患者支援調整職

研究要旨

HIV感染者はHIV感染症の他、長期療養における高齢化や悪性腫瘍等の合併症、肝疾患等、複数の疾患をかかえている。HIV診療は複数の院内診療科及び、部門間の連携を強化し医療機関全体で対応する体制整備が行われている。更に院外の専門医療機関との協働も必要不可欠となり、チーム医療の重要性を認識し専門家間をつなぐ連携機能（コーディネーション）の役割が、医療を滞りなく提供する上で重要な役割を果たす。HIV感染者の在宅療養では、都道府県における良質かつ適切な医療を居住地で安心して受けられる基盤作りが進められる中、医療と福祉・介護の連携強化に必要な地域とのネットワーク構築など、包括的な医療提供の体制整備が求められている。このような医療福祉の連携による包括的な課題に対応する看護師の役割機能への期待は大きく、所属する医療機関の役割に準じた看護実践を担う必要がある。
本研究は多職種間の相互交流を通じてHIV感染者の支援課題を整理することにより、看護師の担う役割機能を明確化し、且つHIV医療体制における看護体制を整備することを目的とする。研究は、(1)首都圏ブロックエイズ中核拠点病院多職種・行政連携会議看護分科会における看護師間の相互交流によるネットワーク構築とその活用の検討、(2)全国のHIV診療に携わる①看護師、②MSW、③心理職を対象とする相互交流を通じて支援課題の抽出と連携強化、ネットワーク構築とその活用の検討、(3)全国のHIV感染症看護師と看護管理者を対象とした看護体制に関する実態調査よりHIV感染症担当看護師の配置と役割機能、育成の現状を分析する。これらの結果を統合して得られた薬害HIV感染者及び、HIV感染者の支援課題に対する看護師の役割機能を整理し、チーム医療・多職種間の連携も念頭にHIV感染症担当看護師及びHIVコーディネーターナースの位置づけ・役割機能に関する提言をまとめ活動指針の一助とする。

A. 研究目的

HIV感染者に携わる多職種間の相互交流を通じてHIV感染者の支援課題を整理し、看護師の役割機能の明確化とHIV医療体制における看護体制を整備することを目的とする。

B. 研究方法

今年度は、以下の研究(1)、(2)-①②③に取り組む。

(1) 首都圏ブロックエイズ中核拠点病院多職種・行政連携会議看護分科会における看護師間の相互交流によるネットワーク構築とその活用の検討

首都圏ブロックエイズ中核拠点病院 多職種・行政連携会議 看護分科会の中で1都4県の8施設のHIV担当看護師に看護研修と看護ネットワーク構築とその活用についてアンケート調査を実施した。

(2) 全国のHIV診療に携わる①看護師、②MSW、③心理職を対象とする相互交流を通じて支援課題の抽出と連携強化、ネットワーク構築の検討

(2)-①「令和5年度HIV感染症看護師相互交流セミナーin首都圏」を令和6年2月22日に開催予定。研修参加者の支援に対する認識や支援課題の抽出、看護師の役割機能について、セミナー前後のアンケートにより調査する。

(2)-②「第3回HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働シンポジウム」を令和4年12月20日に開催し症例を通して看護職とMSWの支援役割や連携について整理した。

(2)-③「令和5年度ブロック・中核拠点病院看護師と心理職の相互交流セミナー」を令和6年3月1日に開催予定。研修参加者の支援に対する認識や支援課題の抽出、看護師の役割について、セミナー前後のアンケートにより調査する。

(倫理面への配慮)

アンケートの実施、研修会におけるデータ解析、症例提示にあたり匿名化を徹底するなど個人情報の保護、倫理面への配慮を十分に遵守し実施した。

C. 研究結果

(1) 首都圏ブロックエイズ中核拠点病院多職種・行政連携会議看護分科会における看護師間の相互交流によるネットワーク構築とその活用の検討

会議は、首都圏ブロック内のエイズ治療拠点病院の看護体制および活動支援、行政との連携によるHIV看護ネットワーク構築について検討することを目的に毎年開催している。出席者はACCの他、1都4県の8施設（資料1）である。

会議の議題は、中核拠点病院でHIV看護研修の基礎レベルを行えることを目標に現在の研修実施状況の確認、各都県の看護ネットワークの構築とその活用状況の2点とし、事前アンケートをもとに意見交換した。

HIV看護研修の実施状況は（資料2）の通りである。院外の研修対象は医療スタッフのみならず、介護福祉スタッフ向けにも研修が行われていた。行政と医療機関との協働開催を行えたのは1施設であった。在宅療養支援に関する研修では、オンライン開催により参加者が増加していた。研修は要請により行なわれていたが、定期開催による基礎研修を2施設で検討していた。定期開催が定着する代替として、ACCのe-ラーニング受講のよびかけが行われ基礎研修の機会を補う状況があった。

資料1　首都圏ブロックエイズ中核拠点病院多職種・行政連携会議看護分科会出席者の医療機関

ACCと中核拠点病院　1都4県の8施設（順不同）

東 京 都 ：地方独立行政法人東京都立病院機構がん・感染症センター都立駒込病院、慶應義塾大学病院、東京慈恵会医科大学付属病院
千 葉 県 ：千葉大学医学部附属病院
埼 玉 県 ：独立行政法人国立病院機構東埼玉病院
神奈川県：横浜市立大学附属病院、横浜市立市民病院
茨 城 県 ：筑波大学附属病院

資料2　中核拠点病院HIV感染症担当看護師向けアンケートの結果

HIV看護研修について
目標：中核拠点病院で基礎レベルの研修が行える

N＝8

質問項目	回答	
院内スタッフを対象としたHIV感染症の看護に関する研修を実施していますか。	実施している	6
	実施していない	2
院外の施設に対してHIV感染症の研修を実施していますか。	実施している	4
	実施していない	4
院外の研修の対象はどのような方ですか。（複数回答）	エイズ治療拠点病院	3
	一般病院	4
	訪問看護ステーション	4
	介護事業所・福祉施設等	4

各都県の看護ネットワークの構築は7施設で構築されていた。残す1施設においては、マンパワー不足や役割を担うことの課題があった。ネットワークを構築しそれを活用していると回答したのは2施設のみであった（資料3）。HIV担当看護師自身がネットワークの活用として認識がないものの、都県内でHIV担当の看護師同士が情報交換できると回答した施設は全施設であり、実際はネットワークを活用している実態のあることがわかった。中核拠点病院が開催した地域意見交換会により顔の見える関係づくりが功をなし、後に複数の医療機関より直接相談が入るようになったところもある。また、受診中断歴のある患者の居住地域の拠点病院と情報交換し受診継続を支える支援の実践も見られた。訪問看護との連携をテーマにWEBディスカッションを開催した施設もあり、徐々にネットワークの構築とその活用は進んでいた。一方、都県内で会議の開催をしても参加施設が固定し広がらず、研修の誘いにも反応なしというネットワーク構築の限界も見えた。行政によってはcovid-19、梅毒、MPOXと感染症対策で多忙のため医療機関との協働が困難な状況が続いているところもあった。

（2）全国のHIV診療に携わる①看護師、②MSW、③心理職を対象とする相互交流を通じて支援課題の抽出と連携強化、ネットワーク構築の検討

(2)-①「令和5年度HIV感染症看護師相互交流セミナーin首都圏」を令和6年2月22日に開催予定（資料4）。HIV感染者がHIV以外の慢性疾患を併存する時代になり、居住する生活圏内で不安なく安心して医療継続ができるように療養支援体制を構築することが急務であることに着目し、薬害HIV感染者の症例を通して地元の医療機関に転院する際の不安や課題に対し、施設間のつなぎとなる看護師が担った役割と支援、及び首都圏の更なるHIV感染症看護師のネットワークの活用について学ぶセミナーを企画した。研修参加者の支援に対する認識や支援課題の抽出、看護師の役割機能について、セミナー前後にアンケートを行い調査する。（次年度報告）。

(2)-②「第3回HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働シンポジウム」を令和4年12月20日に開催した（資料5）。テーマ「他疾患の発症を契機にHIV感染も同時に判明した患者のケアや地域支援体制の構築におけるNSとMSWの協働について」とし、本研究では、協力者としてシンポジウムの運営に携わった。MSWの症例提示では、日頃、地域連携パスなどで脳血管疾患における地域連携の活動に慣れているMSWに対し、HIV感染者の対応にも他疾患と同様に切れ目のない支援を提供することの大切さが理解しやすいように脳血管疾患を契機にAIDS発症が判明した症例を取り上げた。また看護の症例提示では、HIV関連バーキットリンパ腫が判明し一般病院からHIV治療拠点病院に転院したケースを取り上げ、多職種によるチーム医療のもと、安心して入院できる環境を整えるための支援について紹介した。また、この症例は、経過の中で、PMLの発症もあり、それまで独居で自宅退院を目指していた状況が一変し、病状の進行によるADL低下によって、療養先の検討、家族等による支援体制の構築など新たな支援が必要になった。HIV担当看護師と心理士との協働では、病気の受け入れに関する支援、MSWとの協働では、脆弱な地域の受け入れ体制に関する支援について紹介した。HIV感染者の支援における看護職とMSWの連

資料３　中核拠点病院HIV感染症担当看護師向けアンケートの結果

各都県の看護ネットワークの構築とその活用について
目標：ネットワークの活用を継続し強化する

N＝8

質問項目	回答	
看護ネットワークを活用した活動はありましたか。	あった	2
	なかった	6
どのような活動でしたか。	HIV感染症看護師相互交流シンポジウム	1
	東京都エイズ診療拠点病院等看護師連絡会	1
都県内でHIV担当の看護師同士が情報交換できる会がありましたか。	あった	8
	なかった	0
どのようなテーマで情報交換しましたか。	各施設の活動・近況報告	4
	ケース相談（受診中断、在留資格なし）	3
	困ったことの情報共有	3
どのような看護支援課題がありましたか。	受診中断者の関わり	2
	次世代育成	1
	サポート形成支援	1
	外国人支援	1

携のポイントは、支援における視点や内容が重なることもあるため、看護師によるHIV感染者の病状やADLに関する情報収集、MSWによる社会資源の活用を促し療養環境調整を行うための役割分担を行い且つ、HIV感染者の治療経過や病状などの流れを軸に双方で情報共有・相互補完に努めながら支援に対応することとした。

⑵-③「令和5年度ブロック・中核拠点病院看護師と心理職の相互交流セミナー」を令和6年3月1日に開催予定（資料6)。HIV感染症は長期療養が可能な時代となり、高齢化や合併症のコントロール、メンタルヘルスなど 新たな課題も増えている。HIV陽性者をとりまくメンタルヘルスの課題は、精神疾患をはじめ服薬・ 闘病疲れやセクシュアリティによる生きづらさ、HIVに対する差別・偏見など多岐にわたり、HIV治療 や療養に影響を及ぼす。本会は、症例を通してメンタルヘルスの課題をもつHIV陽性者の支援について振り返り、看護職と心理職のそれぞれの役割に基づいた協働と、支援について学ぶことを目的としてセミナーを企画した。研修参加者の支援に対する認識や支援課題の抽出、看護師の役割機能について、セミナーの前後にアンケート調査を行う（次年度報告)。

D. 考察

1）首都圏ブロックの中核拠点病院における基礎研修の実施

現在の研修は定期開催ではなく、要請に応じて行

資料4

令和５年度HIV感染症看護師相互交流によるセミナーin 首都圏

HIV陽性者の長期療養を見据えた
医療と生活圏をつなぐHIV感染症看護師の役割
～HIV看護師の協働による施設の特性を踏まえた転院調整～

日時　2024年2月22日（木）18時00分～19時30分（90分）
対象　HIV感染症看護に携わっている看護職
場所　ハイブリッド
国立国際医療研究センター病院　中央棟1階 集団指導室
ZOOMミーティングによるライブ配信

総合司会　岡村　美里（東京慈恵会医科大学附属病院　看護師）
杉野　祐子（国立国際医療研究センター病院　ACC副支援調整職）
開催挨拶　潟永 博之（国立国際医療研究センター病院　ACCセンター長）
教育講演　照屋 勝治（国立国際医療研究センター病院　臨床研究開発部長）

事例提供「地元に戻る長期療養HIV感染症患者の看護支援を振り返る」
鈴木ひとみ（国立国際医療研究センター病院 ACCHIVコーディネーターナース）
古谷　佳苗（千葉大学医学部附属病院 感染症内科 看護師）

ディスカッション「転院調整に求められるHIV感染症看護師の役割」について

資料5

第３回HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの共同シンポジウム

エイズ治療中核拠点病院と地域医療機関との連携による
支援体制の構築とケアの実際」

日時：2023年12月20日（水）18:00-19:10
開催方法：ZOOMによるオンライン開催
対象者：全国のHIV診療に携わる看護職とソーシャルワーカー

進行　三嶋　一輝 医療ソーシャルワーカ ー（福井大学医学部附属病院）
石井　智美 HI Vコーディネーターナー ス（石川県立中央病院）

開会挨拶 「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究 」班
研究代表者 潟永　博之 エイズ治療・研究開発センター長
（国立国際医療研究センター病院）

シンポジウム
講演１「AIDS 発症に伴う複数の診療科との連携における HIV 担当看護師の役割 」
宮城　京子 HIV コーディネーターナース（琉球大学病院）
講演２「脳卒中で搬送され たHI V陽性者の地域支援体制構築におけるMSWの役割」
木梨　貴博 医療社会事業専門員（福山医療センター）

総合討論

情報提供 「薬害被害救済の個別支援」と「J4H」の仕組みについて
高橋　昌也 医療社会事業専門員
（国立国際医療研究センター病院エイズ治療・研究開発センター）

資料6

「令和5年度 全国のHIV診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー」

メンタルヘルスに課題のあるHIV陽性者に
対する看護職と心理職が協働する支援とは

HIV感染症は長期療養が可能な時代となり、高齢化や合併症のコントロール、メンタルヘルスなど新たな課題も増えています。HIV陽性者をとりまくメンタルヘルスの課題は、精神疾患をはじめ就業・疲労感やセクシュアリティによる生きづらさ、HIVに対する差別・偏見など多岐にわたり、HIV治療や療養に影響を及ぼします。
本会は、メンタルヘルスの課題をもつHIV陽性者の支援について振り返り、看護職と心理職のそれぞれの役割に基づいた協働と、支援について学ぶことを目的としています。
★本セミナーは日本エイズ学会認定制度の教育研修単位申請中です。
（審査結果は、ACCホームページに掲載いたします）

日時　2024年3月1日（金）18時00分～19時30分（90分）
※17時45分～入室可
対象　HIV陽性者の支援に携わっている看護職および心理職
開催形式　ZOOMミーティングによるライブ配信
申込URL　https://forms.office.com/r/Mjd1JFsDH5
締切2月27日（火）
※個人情報は適正管理後の目的に使用いたします。
申込フォーム

プログラム
総合司会：東 政美（NHO大阪医療センター 看護部 副看護師長）
18:00～18:10　開催挨拶　潟永 博之（国立国際医療研究センター病院 ACCセンター長）
18:10～18:30　教育講演　木村 聡太（国立国際医療研究センター病院 ACC心理療法士）
18:30～19:00　事例提供「抑うつを呈したHIV陽性者への初診時からの支援を振り返る」
坂本 涼子（広島大学病院 看護部・エイズ医療対策室）
杉本 悠貴恵（広島大学病院 輸血部・エイズ医療対策室）
19:10～19:25　ディスカッション
「チーム医療における看護職と心理職の協働について」
コーディネーター　東 政美・木村 聡太
19:25～19:30　閉会挨拶　大金 美和（国立国際医療研究センター病院ACC患者支援調整部）

★申請：令和5年度日本エイズ学会認定制度教育研修単位（ICD）（日本エイズ学会）
★会場：令和5年度日本エイズ学会認定制度教育研修単位（ICD）（日本エイズ学会）
【問い合わせ先】
国立国際医療研究センター病院
エイズ治療・研究開発センター
セミナー事務局　白井・長島
TEL：03-3202-7181（代表）
E-mail：hiv-hospital-info@acc.ncgm.go.jp

令和5年度全国のＨＩＶ診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー

メンタルヘルスに課題のあるHIV陽性者に対する看護職と心理職が
協働する支援とは

日時：2024年3月1日（金）18:00-19:30
開催方法：ZOOMによるオンライン開催
対象者：HIV陽性者の支援に携わっている看護職及び心理職

総合司会　東 政美(NHO大阪医療センター 看護部 副看護師長)
開催挨拶　潟永 博之（国立国際医療研究センター病院 ACCセンター長）

教育講演 木村 聡太（国立国際医療研究センター病院 ACC心理療法士）

事例提供「抑うつを呈したHIV陽性者への初診時からの支援を振り返る」
坂本 涼子　（広島大学病院 看護部・エイズ医療対策室）
杉本 悠貴恵（広島大学病院 輸血部・エイズ医療対策室）

ディスカッション 「チーム医療における看護職と心理職の協働について」

うものであり、今後は定期の開催や研修内容の到達目標、修得レベルの統一化を目指すことを検討する。中核拠点病院と行政の協働を進め、より都県内の特徴を踏まえた実践的な内容の研修開催の検討も必要と考える。中核拠点病院の基礎研修の代替として、ACCのe-ラーニング受講のよびかけが行われ基礎研修の機会を補ってきた現状があり、今後も積極的な受講が望まれる。

2）看護ネットワークの構築とその活用

各都県の看護ネットワークの構築は7施設で進められていたが、一方でネットワーク構築の限界もあがっていた。特にマンパワー不足はどの施設も重要な課題となっており、ネットワーク構築を進めている7施設においても上司の協力、病院の理解を得られつつもHIV担当看護師にかかる負担は大きく、各自の責任感で役割が果たされていることが多い。ネットワーク構築の課題について改めて整理する必要がある。看護ネットワークは活用し続けることが最も重要である。HIV担当看護師にネットワーク活用の認識がなかったものの、都県内でのHIV担当看護師の活動実績から、実際はネットワークを活用している実態のあることがわかった。ネットワークの活用と言える活動はどのようなことを示すのか、どのようにネットワーク活用を継続できるのかを会議の議題に取り上げ、具体的な活動を検討していく。

3）MSWと看護職の協働による要介護・要支援者に対する療養支援ネットワーク構築

院内外の多職種や地域スタッフとの連携のポイントは、別々の組織である病院や施設のスタッフが、患者の治療経過や病状などの流れを軸に、患者と同じ目線、同じ価値観を持って多職種が協働することである。看護師の役割は連携機能（患者に一番近い存在で患者のニーズを正確に捉え、それを情報共有するためにチーム医療における多職種間の円滑なコミュニケーションを促し、多職種間で共通の目標を認識しながら支援の順番や内容を役割分担し協働するための機能）を十分に発揮することである。

E. 結論

首都圏ブロックの中核拠点病院における基礎研修の実施については、都県内の特徴を踏まえた実践的な研修の検討を行う。看護ネットワークの構築とその活用継続について、具体的な活動内容を検討し看護師の役割機能を検討する。セミナーによる相互交流により多くの看護職とMSW で課題を共有することができた。多職種との協働における看護職の連携機能の役割について、引き続き症例を通し検討する。

来年度は、本年度実施したセミナーのアンケート調査の分析、全国のHIV感染症看護師と看護管理者を対象とした看護体制に関する実態調査よりHIV感染症看護師の配置と役割機能、育成の現状を分析する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

口頭発表：国内

1) 大金美和. 持効性注射剤がHIV陽性者にもたらすベネフィット. 日本エイズ学会学術集会・総会、共催シンポジウム4、2023、京都.
2) 佐藤愛美、大金美和、田沼順子、野﨑宏枝、鈴木ひとみ、大杉福子、谷口紅、杉野祐子、木村聡太、池田和子、上村悠、中本貴人、渡辺恒二、照屋勝治、潟永博之. HIV感染血友病患者に対するメタボリックシンドロームの判定評価と運動・食習慣に関する支援の一考察. 日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.
3) 宮本里香、田沼順子、大金美和、池田和子、野﨑宏枝、佐藤愛美、鈴木ひとみ、杉野祐子、谷口紅、栗田あさみ、森下恵理子、大杉福子、木村聡太、上村悠、中本貴人、近藤順子、高鍋雄亮、丸岡豊、潟永博之. 薬害HIV感染者における歯科受診とセルフケアの実態と課題に関する調査. 日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.
4) 森下恵理子、池田和子、杉野祐子、谷口紅、鈴木ひとみ、栗田あさみ、大杉福子、野﨑宏枝、大金美和、菊池嘉、岡慎一、潟永博之. 施設入所したHIV感染症患者の特徴と支援内容の検討に関する研究～介護保険利用対象例のケアを振り返って～. 日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.
5) 木村聡太、野﨑宏枝、鈴木ひとみ、大金美和、上村悠、田沼順子、大友健、照屋勝治、潟永博之. 遺族健診受診支援事業からみる遺族健診受検者の現状と課題、日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.
6) 白阪琢磨、天野景裕、大金美和、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本学、潟永博之、日笠聡、八橋弘、岡慎一. エイズ発症予防に資するための血液製剤によるHIV感染者の調査研究. 令和4年度報告書.
7) 白坂琢磨、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本学、潟永博之、日笠聡、八橋弘、岡慎一. 血液製剤によるHIV感染者の調査成績第1報　健康状態と生活状況の概要. 日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.
8) 川戸美由紀、三重野牧子、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡慎一、岡本学、潟永博之、日笠聡、八橋弘、白坂琢磨. 血液製剤によるHIV感染者の調査成績第2報　日常生活の影響と主観的健康の検討. 日本エイズ学会学術集会、2023、京都.
9) 三重野牧子、川戸美由紀、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡慎一、岡本学、潟永博之、日笠聡、八橋弘、白坂琢磨. 血液製剤によるHIV感染者の調査成績第3報　こころの状態の関連要因の検討. 日本エイズ学会学術集会・総会、2023、京都.

H. 知的所有権の出願・取得状況（予定を含む）

なし